

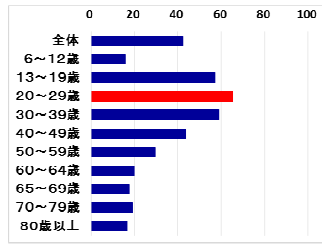
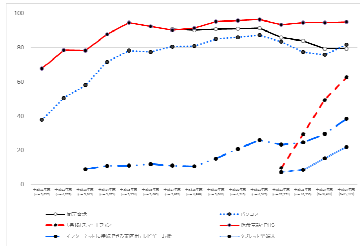


青年期におけるケータイ依存傾向と対人関係の問題

○北見由奈(帝京短期大学), 清水安夫(国際基督教大学)

キーワード: 友人関係, ケータイ依存, 大学生

1. 問題と目的



スマホ普及率 62.6% SNSを利用する若者が増加。

(総務省, 2013)

SNS利用のメリット

- ・ 実質的な対人コミュニケーションに比べて対人緊張が低い(都築・木村, 2000)。
- ・ 知人関係の拡大化や繋がり強化に影響(下田, 2006)。
- ・ 良好な人間関係を築きやすい(Parks & Roberts, 1998)。

SNS利用のデメリット

ネットいじめの被害者になることへの不安から, SNSの利用をやめられない若者が増加(MSN日経ニュース, 2013)。

本研究では, 友人との付き合い方とケータイ依存傾向との関連性について検討。

2. 方法

【調査対象者】

首都圏近郊の大学に在籍する1年生 - 4年生。

313名(男性117名, 女性196名, 平均年齢 20.18 ± 1.174 歳)。

【調査時期】 2011年11月から12月。

【調査内容】

1. SNS利用の有無について:

2. 友人との付き合い方:

「友人関係尺度(岡田, 1999)」⇒ 4因子(自己閉鎖, 傷つけられることの回避, 傷つけることの回避, 快活の関係)計35項目から構成。

3. ケータイへの依存傾向:

「ケータイ依存傾向尺度(北見・清水, 2013)」⇒ 3因子(物理的依存, 心理的依存, 電池切れ不安)の計13項目から構成。

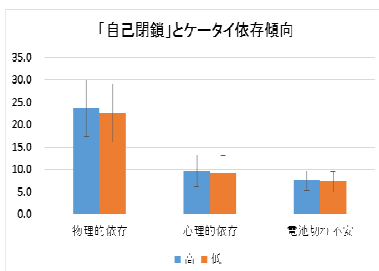
【分析方法】

1. 友人関係尺度における各下位尺度得点を平均値 $\pm 1SD$ を基準に**高群・低群に分類**。

2. 友人関係尺度における高低群を独立変数、ケータイ依存傾向尺度における各下位尺度得点を従属変数とした**対応のないt検定**を実施。

3. 結果

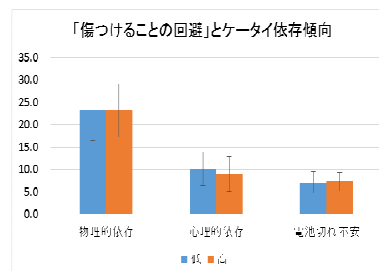
【友人との付き合い方 × ケータイ依存傾向】



有意な差は認められない。

「物理的依存」 $t(168)=0.951$, ns
「心理的依存」 $t(167)=0.948$, ns
「電池切れ不安」 $t(169)=0.734$, ns

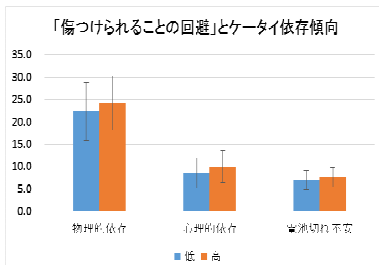
自己閉鎖的な友人関係とケータイ依存傾向との関連性は乏しい。



有意な差は認められない。

「物理的依存」 $t(101)=0.069$, ns
「心理的依存」 $t(101)=1.563$, ns
「電池切れ不安」 $t(101)=0.417$, ns

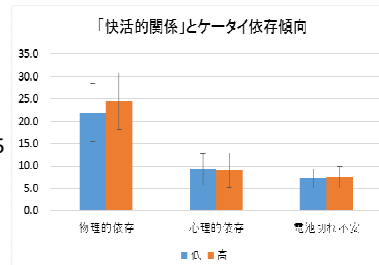
傷つけられることを回避するような友人関係とケータイ依存傾向との関連性は乏しい。



有意な差が認められる。

「物理的依存」 $t(169)=2.001$, $p<.05$
「心理的依存」 $t(168)=2.601$, $p<.01$
「電池切れ不安」 $t(170)=2.092$, $p<.05$

傷つけられることを回避するような友人関係はケータイ依存傾向を高める。



一部において

有意な差が認められる。

「物理的依存」 $t(108)=2.086$, $p<.05$
「心理的依存」 $t(108)=0.178$, ns
「電池切れ不安」 $t(109)=0.847$, ns

快活な友人関係は「物理的」ケータイ依存傾向を高める。

4. 考察

- ・ 友人との付き合い方において, 傷つけられることを回避する傾向のある者は, ケータイに対する依存傾向が高いことが明らかとなった。⇒ **ネットいじめの被害者になることへの不安??**
- ・ 快活の関係になるように振舞っている者ほどケータイに対する「物理的依存」傾向が高いことが明らかとなった。

【物理的依存】⇒ 「人との会話中でも, ケータイをさわることがある」, 「食事をしながらでも, ケータイをさわることがある」, 「授業中でも, ケータイをいじってしまう」, 「くつろいでいる時には, 必ずケータイをいじってしまう」, 「歩きながら, ケータイを使うことがある」, 「家族との団らん中でも, ケータイは持っている」, 「トイレでもケータイを見ることがある」